

## 送辞

本日、高二の先輩たちは、補習校のゴールを切り、それぞれの道へ進もうとしています。様々な困難にぶつかりながらも走り続けてたどり着いたゴール、今は成し遂げた達成感でいっぱいではないでしょうか。

僕は昨日の卒業を祝う会ではあとひとつ実感が湧きませんでした。今日、先輩たちの姿勢を見て、先輩たちが去つてしまふ現実を実感しはじめています。昼休み恒例のバスケ、もうボールを取り合うこともないのかと思うと寂しさが胸が押しつぶされそうです。

僕が中一の時は、コロナの影響でリモート授業でした。中二で対面授業に戻ってからも、イベントも少なくクラス単位でひっそりと授業を受けていました。先輩たちとの交流を持つ機会もなく、ただただ宿題をこなし、授業を受けて過ごした日々でした。

中三になり、様々なイベントも復活しました。初等部では味わえなかった学年を超えた交流、本当の意味で生徒会活動の楽しさを知ることが出来たのもこの年からでした。

高等部に入ってから先輩と後輩の繋がりも少しずつ強くなりました。生徒会に関わる時間も増え、高二の先輩たちとはもっと距離が縮まり、ますます補習校生活が楽しくなりました。少しずつ強くなった先輩後輩の「絆」。その中で、僕は二つのことに気が付きました。

一つは、先輩後輩の隔たりを超えられたことです。先輩方は個性にあふれ面白い人ばかりで、気楽に話し合えて、時々先輩だと言うことも忘れてしまうほどでした。生徒会長のことを「ション」とアメリカンネームで呼び捨てにできるくらいに。一緒にスポーツをしたり、生徒会イベントについて話し合ったり、共に楽しんだりしていると上下を隔ている壁の存在など微塵も感じられませんでした。

もう一つは、「ニコニコ」と言う時には頼りになる、大きな存在でもあったということ。運動会で僕たち白組が負けていた時でした。先輩たちは率先して旗をふり、大きな声で応援をして、後輩たちを鼓舞し元気づけました。そして白組のみんなの魂に火がつき、全力を出し切ることができました。

このような重要な場面では真剣に取り組み、僕たち後輩に大きな背中を見せてくださったのです。先日、「校伝統のスピーチ大会がありました。最後の大トリのスピーチは生徒会のことについて述べられたものでした。そのスピーチは淡々と語られましたが、先輩が言いたかったことは僕には深く伝わりました。先輩は最後に英語の格言、「All for one, and one for all」で締めくくりました。生徒会を運営してきた先輩の、ずっと心に置いてきた「座右の銘」だとすぐに分かりました。

「校の運動会の種目に紅白リレーがあります。運動会恒例の一番盛り上がる最後の種目、初等部一年から高等部二年まで赤・白・黄色・ピンクの4チームに分かれてゴールを目指し、バトンで繋ぐ競技です。そのリレーのように、先輩たちは補習校の「絆」と言うバトンを持ち、アンカーのたすきを掛け、補習校生活を走り抜きました。今、たすきを外し、「絆」のバトンを置き、後輩の僕たちに託そうとしています。僕達、高一はその先輩方の姿を目に焼き付け、先輩方の強さと優しさと柔軟さを引き継ぎ、来年は、アンカーを力一杯走り抜き、後輩達へと繋いでいこうと思います。そしてそのバトンをつないだ先には、「All for one, and one for all」の先輩方の理念が息づいた補習校の未来が見えるような気がします。

数え切れないほどの先輩たちとの楽しい思い出は、一生色褪せることはないでしょう。ありがとうございました。

そして、ご卒業おめでとうございます。

## 答辞

みなさま、本日は私たち卒業生のために、このような素晴らしい卒業式を開いていただき、また、たくさんのお祝いの言葉もいただきまして、ありがとうございます。

補習校の初等部に入学してからの六年間は、私にとってとても長い時間でした。その間、私はたくさんのことを学びました。けれど、私は、日本語や漢字だけを教えてもらったものではありません。私は、友達とはどういうものか、そして、大変だった漢字の勉強が自分への自信につながる、ということも学びました。

一年生に入学した時は、私はとてもシャイだったことを覚えていきます。だれかと話すとき、ものすごくきんちょうしました。でも、クラスメイトたちにやさしくかんげいされて、仲良くなりました。そして、クラス全員でカフェテリアで宿題をやったり、文句を言いながらも、授業で協力し合ったり、困っているときや悲しいときも、みんなで助け合いました。

運動会の時、クラスが白組と紅組に分かれて反対のチームになってしまった時だって、公園で一緒に練習して、どうやってリレーに勝てるかのヒントを語り合いました。勝ち負けより、助け合うことを選んでことが、とてもうれしく感じられました。

また、授業中にいたずらをしたり、おしゃべりをしたりした時でも、みんなで責任を取って、一緒におこられました。でも、だれも個人を責めたりしませんでした。今となっては、クラス全員のきずなを深めた大切な思い出です。補習校からもらった一番大切なものは、信頼できる友達が作れたことだと言っても過言ではありません。六年一組のみんなは、私にとってとても大事な友達です。

補習校で一番大変だったのは、宿題です。現地校の宿題と両立するのはしんどかったし、漢字の勉強は大変でした。おこられながらも、毎日母と一緒に、漢字テストの勉強をしました。でも、今は母に言われなくても、一人で勉強できるようになり、それが自分だけでもできるという自信に変わり、この勉強する習慣が私の生活の一部になりました。今なら、分かります。この大変だった時間は、日本語だけでなく、様々なことを学ぶために必要だったのだと。

四月、私は中学生になります。これからも、もつと補習校で勉強し、バイリンガルのアートセラピストになれることを目指して、たくさんのことに挑戦していきたいと思います。

最後になりますが、今日まで補習校を続けてこられたのは、これまで指導してくださった六年一組の豊田先生、ならびに、校長先生、教頭先生、これまで指導してくださった先生方、バーンズ先生、スタッフの方々のおかげです。心からお礼を申し上げます。そして、学校行事を支えて下さった保護者会とボランティアをして下さった保護者のみなさま、本当に有難うございました。それから、お父さんとお母さん、今まで私を支えてくれてありがとうございます。これからも、応援してくださいね。

私たち卒業生の補習校生活を支援してくださった全ての方々に、心から感謝を申し上げます、これを答辞といたします。

本当にありがとうございます。

本日は、私たち卒業生のために、このような素晴らしい卒業式を開いていただき、ありがとうございます。私が幼児部から補習校に通い始めて、もう七年が経ちました。七年もよく頑張ったなど自分でも驚いています。多くの方々の助けが無ければ、私は今、このステージに立つことができなかったと深く感謝しています。

幼児部の頃は、楽しいイベントがたくさんありました。七夕やお誕生日会、もちつきや豆まき。中でも一番楽しかったのはカレー作りです。玉ねぎを切ったときに泣いてしまったこと、みんなで食べたカレーがとてもおいしかったことを今でも覚えています。

また他に印象に残っているのは、読み聞かせです。その時に絵本を読んでもくれた六年生のお兄さんお姉さんはとても大きくてかっこよく見えました。今年、私は幼児部の皆さんに読み聞かせをしました。幼児部の子供たちはとても可愛くて、小さくて、私は、私が六年前に憧れていた絵本を読んでもくれるお姉さんになっていたのがとても不思議だけど、嬉しく感じました。

振り返ると、補習校での七年間は、学年が上がるたびに、大変だったり辛かったりした事がたくさんありました。低学年の頃は、コロナ禍で、通学ができなくなりました。通学が始まった後も学校全体で盛り上がる運動会もなく、楽しみにすることがありませんでした。コロナ禍が終わってからも、毎週土曜日の早起きや漢字テスト、現地校の宿題と補習校の宿題の多さに辛く感じることもありました。特に、四、五年生の時、仲良くなった友達がどんどん引越して居なくなってしまう事はとてもさみしく、補習校での時間がとても長く感じられるようになりました。楽しいはずの休み時間も、何をして過ごせばいいかわからない時間になりました。

それでも私が補習校を続けることができたのは、沢山の出会いがあったからです。大変だな、辛いな、と思うたびに、優しい先生方が助けてくれて、まるで友達のように話をしてくれました。そのおかげで、新しく引越してきたクラスメイトとも仲良くなる事が出来ました。私は日本に住んだことがないので、そのクラスメイトたちから今まで聞いたことのない言葉や、日本の流行語を教えてもらいました。家に帰ってお母さんにその言葉を言ってみたら、とてもびっくりされたこともありましたが、それもまた、私にとって補習校での良い思い出となっています。

家族の支えも本当に大きかったです。毎週の送迎はもちろん、宿題を見てもらったり、冬休みには毎年漢字検定の勉強をしたりしました。帰りの車では、補習校の出来事を話しながら一緒になって笑ったり、怒ったり、私をいつも応援してくれました。

このように、私は七年間たくさんの人に支えてもらいました。補習校での辛い時も楽しい時も、助けてくれた先生方、友達、そして家族のみなさん、本当にありがとうございました。私はこれから中等部に進学します。この七年間で得た経験を活かし、これからも先生や友達の力を借りながら、将来のために努力していきたいです。最後になりますが、これまで私たちを支え、見守ってくださった全ての方に、心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

## 答辞

3月になって春を感じられる季節となりました。私たちLⅠ校中等部3年1組が無事に卒業式を迎えられたことをサポートしてくださった保護者の皆様、そして補習校に関わる全ての皆様に心から感謝します。

私が補習校に入学したのは約6年前です。6歳まで日本で育った私が急にニューヨークに引越すことになり、引越してすぐに入ったのが補習校でした。入学してすぐに私は補習校は勉強のためだけではないことに気づきました。そこは大事な仲間や大好きな先生に会う場所でもあり、今は日本に住んでいるけどまだ仲良しな親友や、尊敬する先生に補習校で出会うことができました。運動会の後、親友としゃぶしゃぶに行ったり、放課後補習校の横にある公園で遊んだりしたことは今でも大事な思い出です。

その他にも、毎年補習校には、秋祭りや餅つき大会があり、日本の文化にあまり触れ合う機会がない私たちにとって日本人であるということを誇りに思わせてくれる機会となりました。私たちのアイデンティティーを大切にする上で、補習校は大きな一部となったことでしょう。

でも私にとっては、ここまでの道のりは楽しいことばかりではありませんでした。早生まれの私は現地校の授業より前に進む補習校の授業の内容にだいぶ苦戦した時期もありました。母とは何回も喧嘩し、授業内容を理解するのに時間がかかる自分を悔しく思う時もありました。でもその時頑張ったおかげで今の私があります。あんなに嫌いだった作文は今では好きになり、コンクールにも入選できました。数学は今でも完璧ではありませんが、以前のように途中で諦める事は少なくなりました。努力の大切さを教えてくれた補習校に感謝しています。

私は今日補習校中等部を卒業し、明日で十五歳になります。新しいスタートを切りますが、補習校でできた大事な思い出はいつまでも宝物です。これからも補習校で今まで学んできたことを忘れずに前に進んでいきたいです。

最後に、毎朝明るい声で挨拶してくれたピーターさん、勉強面でサポートしてくださった先生方、生徒会で優しくしてくださった先輩方、9年間同じ教室で勉強を頑張ったクラスメイトの皆、本当にありがとうございました。今日会場にいる妹の2

人に、毎日あなたたちのせいで色々大変だけど、毎日笑わせてくれてありがとう。最後に両親の2人にも、私のことを信じてくれてありがとう。そして、まだまだ頑張るから、見ててね。感謝の気持ちを載せて、答辞とします。

私の母方の祖母は日本人です。でも私の母は日本語にはあまり馴染みが無く家庭での会話は全て英語で成り立っています。私の家族は父の仕事の都合で3歳から7歳までを日本で過ごし、アメリカへ帰国後はカリフォルニアのサンノゼ補習校に通いました。その後小学三年生の2学期にニューヨークの補習校に転校し今日に至ります。強いて言うなら私は逆帰国子女です。

私にとって、この中等部での3年間は、まさに「光陰矢の如し」。中等部に入学したことがつい昨日のこのように感じられます。

我が学級は生徒数19人での出発、とてもにぎやかで活気に満ちあふれていました。

ところが、中二が始まるころより、帰国や転出が増え人数が減りだし、クラスの規模がだんだん小さくなってきました。最終的に今日共に中等部を卒業する級友は7人になってしまいました。しかし私達にとつて、このクラスはかけがえのない仲間達で成り立っています！ 私たちは週に一回しか会えませんが、現地校とは違い三年間ずっと同じ顔ぶれです。長い時間をかけてどんどん仲良くなっていくことができたのがとてもうれしかったです。

私たちのクラスのテーマは「十人十色」。

一人ひとり個性は違うけれどそれぞれの良さを認め合って、自分らしさが輝くクラスを目指してきました。

補習校最大の行事「のみの市」では、この少人数でイベントを行うのはとても困難

でした。雑貨、食べ物、ゲームなどを準備し、初等部の皆さんや一般の方々を紹介、購入をお願いしました。昨年と同じメンバーだからこそ、昨年の反省を生かして作戦を練ることが出来ました。

当日は食事をする時間を割いて、気恥ずかしさをおぼえながらも積極的に会場以外の教室へも、出張販売に行きました。全員で協力し準備してきたベークセールでの商品を全部売り切ったときは、達成感に満たされ、私自身がとても感動しました。クラスの人数が一番少なくても、こんなことができるんだ、たった7人で乗り切ったこのクラスは本当にすごいと、みんなを誇らしく思いました。このような経験は現地校では味わえません。

六年の時の担任の先生が「中等部へ行ったら学校がもっと楽しくなるよ。」とおっしゃっていましたが、本当にその通りでした。

現地校に月曜から金曜まで通い、さらに土曜日も補習校ということとは、自分なりにかなりの努力をしてきたように思います。金曜の夜、大雪が降りますようにと願ったことは一度や二度ではありません。ごめんなさい。

私は長年継続してきたスポーツの大会が、土曜日に開催されることが多々あり、補習校を欠席しなくてはならない場面がありました。授業あるいは学校行事に参加できない時は、正直焦りますし場合によっては疎外感を感じることもありました。でも担任の先生が宿題の提出や、

欠席届けについて忍耐強くご指導してくださった事、励ましてくださったことに感謝しています。

時々英語が授業中に飛びかうことが多く、先生からは何度も「日本語をしゃべる機会があるのは自分の家族と補習校しかないのに、ここまで来てなぜ英語を話すの!？」と注意を受けました。私が一番怒られたのではないかと自負しています。

「自分には日本人の血が流れているんだ」ということについてのアイデンティティーを保つことができたのは補習校、先生たち、友達、そして日本語の読み書きがほとんど不可能な中、支えてくれた両親のおかげです。

この三年間で得た経験や友情は、私たちの心に深くきざまれたと思います。

「少人数だからダメ」と感じるのではなく、「少人数だからこそ、より沢山のものを得ることができた」と感じる選択をした自分たちに、心から拍手を送りたいと思います。助け合いながら過ごした日々は、他では得られない特別な思い出です。補習校で学んだことや築いた絆は、これからも私たちを支えてくれるでしょう。

私は、この四月から高等部で生徒会副会長として、学校生活を出発します。

今までは、「学級」の一員として活動してきましたが、これからは「学校」の一員ということを見据えて行動していかなくてはならないと痛感しています。今日は中等部卒業という一つの区切りですが、私たちの成長はまだまだ続きます。これからも、ずっと頑張り続ける自分でありたいと思います。

ありがとうございます。

卒業生代表 W校 中等部三年

校庭の桜の蕾が膨らみ始め、暖かな春の日差しを感じる季節になると、私は、十二年前、補習校に初めて入園した日のことを思い出します。私にとって、十二年間の補習校生活は、長い長い飛行機のフライトのようなものでした。私は、NY生まれ、NY育ちですが、両親が日本人なので、物心ついた頃から、日本とアメリカの二つの心を持って育ちました。それ故に、五歳の頃の私は、とても神経質で不安の多い子供でした。新しい環境に飛び込むことが苦手で、次に何が起こるのかを考えるといつも不安な気持ちでいたように思います。

そんな私が、十二年前のあの日、「JWS号」という名の飛行機に乗り込みました。私を乗せたその飛行機は、その時は、考えもしなかったけれど、高校卒業という目的地へ向けて、仲間とともに、長い長い旅路へと出発したのです。飛行機は、普通、風に向かって離陸します。まさに五歳の頃は、泣き虫で、不安定で、逆風の中の離陸でした。いったん離陸すれば、ドアは開けることができないうし、途中で降りることもできません。ただひたすら、卒業という目的地へ向かって航路を進むのみでした。もうやるしかないのです。そして、私は、幼児部を卒園し、小学校六年間を仲間と共に過ごし、中等部へと進学することになりました。

この頃には、徐々に、「JWS号」でのフライトを楽しめるようになっていました。

しかし、そんな矢先、「JWS号」にバードストライクなる出来事が襲い掛かりました。コロナパンデミックで、学校が閉鎖され、全ての授業がオンラインで行われることになったのです。仲間と会うことはもちろんのこと、行われるはずの行事なども全て中止となり、たくさん制限を受けました。それでも、画面越しの仲間達の笑顔は、いつもと変わりなく、オンラインだったからこそ、できた思い出もありました。こうして、私達は、コロナ禍でも、多くのことを学び続け、いつか再び仲間と会えることを信じ、この危機を乗り越えました。フライト中は、本当に数えきれないくらい色々なことがありました。楽しいことも、もちろん、苦しいこともありました。そんな時は、「いつそ、この飛行機から降りてしまいたい。」と、何度、思ったことでしょうか。長いフライトの中では、友達同士の揉め事などもあり、搭乗者の気持ちバラバラになったこともありましたが、相手を自分と同じように思いやることで、何か良い解決策を見出し、その度に友達との絆を深めていった様に思います。途中の経由地では、飛行機を降りる友人もいて、たくさん別れを経験しました。同時に、新しく乗り込んでくる友達もいたり、『JWS号』の中は、いつも笑いが絶えませんでした。時には、乱気流に見舞われ、飛行が不安定になったり、悪天候で、視界がゼロになったりした時もありましたが、それでも、目的地へ向けて、高度を上げ続けて行きました。

中学校の終わり頃、私に、大きな転機が訪れました。引越しをする事になったのです。それは、転校を意味し、私は、生活環境を変えなくてはならなくなりました。ストレスがいっぱいで、気持ち不安な時も、私達の「JWS号」のフライトは、変わらず、続いていました。「補習校へ行けば、仲間がいる」そのことが、どんなにか、私の気持ちを奮い立たせてくれたことでしょうか。高等部への進学時に、私が、決めたことは、「何事にもまずはチャレンジする。」「物事には、否定から入らず、常に前向きな姿勢をとる。」「この二点でした。世の中、やってみないとわからないことばかりです。やるかやらないか、ゼロになんをかけてもゼロなのです。小さな一歩でも踏み出すことができれば、それは、大きな成長につながるはずです。」「JWS号」では、私のそういう姿勢に共感してくれた仲間たちが、次第に、クラスの取りまとめ役として、私のことを信頼してくれるようになり、

私達の友情や団結は、揺るぎないものとなって行きました。その頃、「JWS号」は、いよいよ最後の目的地、「卒業」へ向けて、エンジン全開で上昇を続けていました。「JWS号」のフライトの中で、一番、印象に残っているのは、伝統のクレープ作りに挑戦したことでした。メンバー全員で、前日から、泊まり込みで、約三〇〇個近いクレープを作りあげ、誰一人想像しなかった勢いで、完売し、目標金額を達成したことは、私だけでなく、クラスメイト全員の大きな財産となりました。このクレープ作りでは、リーダーとは、人の上に立つのではなく、みんなを下から支えるものなんだと私に気づかせてくれた大きな出来事でもありました。

十二年に及ぶ長いフライトも、ついに今日で終わりです。着陸後は、五歳の頃の泣き虫の私では、見ることでできなかった景色が、目の前にきつと広がっていることと思います。今日、私達は、「卒業」という目的地へ到着します。その後は、きつとみんなそれぞれに、新しい次の目的地へと進んでいくことになるでしょう。「JWS号」でのフライトは、どれだけ飛行したかではなく、どこをどう飛んで、どんな飛び方をしたかが、私達のこれからの新しい行き先の道標となるはずだと、私は信じています。

最後に、十二年に及ぶ長い「JWS号」のフライトに同乗してくれたクラスのみんなに、まずは、「よく頑張った。」と、これまでの苦労を分かち合い、共に笑い、お互いを励まし、どんな時と一緒にいてくれたことに「ありがとう」と、お互いに言葉を交わしたいと思います。私達の心のマイレージは、満タンです。そして次に、この「JWS号」への搭乗チケットを私達に渡し、飛行機に乗り込む機会を与えてくれて、いつも励まし、背中を押し続けてくれた両親たちや、飛行中、私達、みんなを常に支えてくださったクルーである先生方、そして、安全に目的地までの飛行ができるようにご尽力いただいた地域の皆様に、感謝したいと思います。私達は、今日からは、未来へ向かって、ニューヨーク補習校で学び、経験したことを胸に、「視界良好、エンジン全開」で、さらに高く高く、飛び続けたいと思います。最後に、卒業生を代表してもう一度、心からの感謝を申し上げ、答辞の言葉とさせていただきます。本当にありがとうございます。

卒業生代表 W校 高等部二年